国語科

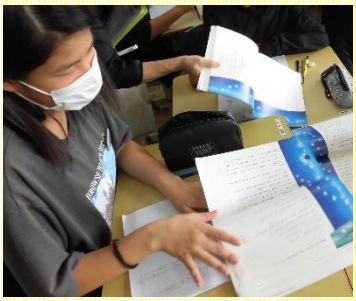
令和２年度　教育論文

【研究主題】

読むことを通して考えを共有し

表現する力を育成する国語科授業の創造

～第６学年「やまなし」の実践から～



―目次―

はじめに
目次

Ⅰ　研究主題について

１　研究主題 1

２　主題設定の理由 1

（１）教育の今日的課題から

（２）本校の教育目標から

（３）児童の実態から

３　研究主題の捉え方 2

（１）「考えを共有」することについて

（２）「表現する力」について

Ⅱ　研究の構想

１　研究の仮説 3

２　仮説検証の手立て 3

３　研究の全体構想図 4

Ⅲ　研究の実際

１　単元について 5

２　仮説に対する手立て１：
「考えの形成と共有を促す学習活動の工夫」 7

（１）児童の興味・関心を喚起する工夫

（２）自分の考えを明確にする工夫

（３）考えの共有を促す工夫

３　仮説に対する手立て２：
「学んだことを活用し主体的に表現しようとする学習活動の工夫」 14

（１）学ぶことへの必要感や目的意識が持続する工夫

（２）自分の読み方を自覚する工夫

（３）振り返りの充実と活用

Ⅳ　成果と課題

１　成果について 18

２　課題について 20

引用文献及び参考文献
おわりに

はじめに

言葉の豊かさや国語科授業の面白さに魅せられ、今年、教職１３年目を迎えました。子どもたちが生き生きと書き話し、楽しんで学ぶ、そんな授業をされる尊敬する先輩方に出会い、「私もこんな授業がしてみたい」という思いがありました。

一方で、「もっと一人一人の考えを引き出したいのにうまくいかない」という授業に対する歯がゆさや、「教室の中で、違う意見を交わすからこそ新しい考えが生まれる面白さを子どもたちと分かち合いたい」「授業で身に付けた力を、他の学習や生活の中で活用できる力につなげたい」という思いをもつようになりました。

そんな中、昨年度、県立教育センターの国内留学生として学ぶ機会を頂きました。学習指導要領を一から読み直し、様々な本を読み、所員の先生方から御指導頂く中で、理論を基に実践に取り組む重要性を痛切に感じるとともに、自身の授業改善に通じる学びを多く得ることができました。

今年度、龍野小学校で６年生を担任することになり、大切にしたいと思ったことは「子どもたちと共に学ぶ教師であること」です。子どもたちが自ら学ぼうとする力を育てるために私にできること、私にできる授業は何か模索しながら授業研究に取り組んできました。

特に、本研究では、自分の考えを主体的に表現する力の育成に着目し、読むこと領域における「やまなし」の授業について検証を進めていきました。子どもたちが考えを形成し、共有し、表現していく過程を様々な角度から分析するとともに、考えをもつための学習活動の工夫や考えを共有する際の手立ての工夫によって、子どもたちの表現する力がどのように変容していったのか、本研究で明らかにしていったところです。

拙い研究ではありますが、御一読の上、諸先生方の御指導、御助言を頂ければ幸いです。

Ⅰ　研究主題について

１　研究主題

読むことを通して考えを共有し表現する力を育成する国語科授業の創造
～第６学年「やまなし」の実践から～

２　主題設定の理由

（１）教育の今日的課題から

子どもたちが生きていく社会は､変化の激しい予測困難な時代であると言われて久しい。そして今まさに、先の見えない状況が世界中で広がっている。新型コロナウイルスによる感染拡大が続く中､「正解のない問題」に対応する力があらゆる場面で求められている。さらに人類が抱える問題は多岐に渡る。頻発する自然災害やAIがもたらす格差社会、超高齢化社会の到来など、予測が難しいこのような状況においては、課題に主体的に向き合い他者と協働し、私たち一人一人が適切に選択・判断し、納得できる考えや最適な解を見出していかなければならない。

こうした状況を踏まえ、小学校学習指導要領（平成２９年告示）解説総則編[i]では、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を，ア「何を理解しているか，何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得)，イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」，ウ「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」の３つの柱に整理すると明記された。

さらに、子どもたちが学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするため、学習の質を一層高める授業改善の活性化が求められている。これは、単に授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、目指す資質・能力の育成につながる「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を示している。

以上のことから、子どもたちがこれからの社会をよりよく生きるために必要な資質・能力の育成を目指すことと、「生きる力」を育む授業の創造が求められている。

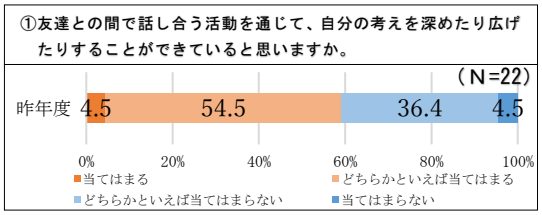
（２）本校の教育目標から

本校は、学校教育目標を「ふるさとに、笑顔広げる龍野っ子を育てる」とし、「元気にチャレンジする子ども」「まわりの人を大切にする子ども」「話を聞き、考えを発表する子ども」を目指す子ども像として掲げている。知・徳・体の視点から、児童一人一人が自分のよさや伸びを実感できる教育活動の推進を目指すものである。このような児童の姿は、将

来を見据えて他者と協力しながら自らの力を高めていく姿であり、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業改善によって育まれると考える。よって、目指す児童像の実現に向けて研究を進めることが、学校教育目標の具現化につながると考えた。

（３）児童の実態から

昨年度の県学力調査（１２月実施）意識調査では、話し合い活動において自分の考えを深めたり広げたりすることができていると実感していた児童は５９％であり、相手の立場や考えを考慮して話を聞こうとした児童の割合は全校平均と比較して１４．４％低くなっていた（図１）。このことから、児童は自分の考えが広がり深まったと実感する機会があまり持てていなかったと考えられ、相手の考えに対し興味・関心を持って聞こうとする意識も低かったことが推測される。また、質問項目③も全国比に対して１９．４％低くなっており、相手意識をもって書いたり読んだりすることにも課題があると考えられる。



質問内容	母集団	肯定群割合(%)
②話し合いをするときに、相手の立場や考えを尊重して話を聞いている	本校	７２．７
	全国	８７．１
③文章を書いた後、相手によく伝わるように書けているか読み直すようにしている。	本校	５９．１
	全国	７８．５

図１　昨年度の県学力調査（意識調査の結果から）

以上のことから、自分の考えを伝え合う活動の充実と、学習への目的意識や必要感を高めていくことが重要と考える。児童の実態を踏まえ、自分の考えが他者との共有によって広がったり深まったりしたと実感できるような学習活動の充実を図り、学んだことが日常生活に活用されるような力の育成を目指し、授業改善に取り組んでいく。

３　研究主題の捉え方

（１）「考えを共有」することについて

学習指導要領解説国語編（以下解説）[ii]では、読むことの領域における共有のことを、「文章を読んで形成してきた自分の考えを表現し、互いの考えを認め合ったり、比較して違いに気付いたりすることを通して、自分の考えを広げていくこと」と示している。今回から指導事項に新たに共有が加わり、授業づくりにおいて重視されていることが分かる。

また、考えを共有するには、一人一人が自分の考えを形成しておく必要があり、「読んでみたい」「書いてみたい」という学習への意欲的な態度が不可欠である。さらに、考えを伝え合う場面では、児童は他者の考えと比較することで相違点に気付くことができ、そこから自分の考えを検討したり新しい発想につなげたりできると考える。すなわち、考えを共有することは、児童の思考力や判断力等を育成することに密接に関わっていると考える。

以上より、本研究における「考えを共有」するとは、「一人一人が形成した自分の考えを

書いたり発表したりする中で、相違点や互いのよさに気付き、自分の考えを広げていくこと」と捉える。

（２）「表現する力」について

解説では、国語科における目標を、「言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力[iii]」を育成することと示された。ここで、「正確に理解する資質・能力と，適切に表現する資質・能力とは，連続的かつ同時的に機能するもの[iv]」と示されているため、理解する力と表現する力は行き来しながら共に育成されていくと捉える。

また、考えを表現するには受け止める他者が必要である。伝え合うという関係性の中で人は、相手が理解できている内容か検討し、納得してもらえるよう表現の方法を工夫するなど、主体的に関わろうとする。さらに、伝え合うことで自分の考えが明確になったり考えを再構築できたりし、論理的に思考する力や豊かに想像する力を養うことにつながる。このような力は､授業だけに留まらず､実生活で生きて働く力として活用されると考える。

以上より、本研究における「表現する力」とは、「学習等を通して考えたことを、相手に伝わるように適切に書いたり話したりする力」と捉える。

Ⅱ　研究の構想

１　研究の仮説

自分の考えを形成し共有する学習過程を重視し、学んだことを活用できるような学習活動の工夫を行えば、児童の適切に表現する力を育成することができるだろう。

２　仮説検証の手立て

仮説を検証していくため、以下に示す二つの手立てを設定した。今回の研究では、６年生の２学期で取り組んだ文学的な文章「やまなし」の単元を取り上げた。そこで、二つの手立てに基づき、以下に示した具体的実践事項を軸にし単元計画を考えていった。

考えの形成と共有を促す学習活動や、学んだことを活用し主体的に表現しようとする学習活動を工夫することが、本研究で目指す力の育成に有効かを検証していく。

手立て１：考えの形成と共有を促す学習活動の工夫	手立て２：学んだことを活用し主体的に表現しようとする学習活動の工夫
・　児童の興味・関心を喚起する工夫 ・　自分の考えを明確にする工夫 ・　考えの共有を促す工夫	・　学ぶことへの必要感や目的意識が持続する工夫 ・　自分の読み方を自覚する工夫 ・　振り返りの充実と活用

３　研究の全体構想図

【学校教育目標】
「ふるさとに、笑顔広げる龍野っ子を育てる」

目指す子ども像
〇元気にチャレンジする子ども
〇まわりの人を大切にする子ども
〇話を聞き、考えを発表する子ども

研究主題
読むことを通して考えを共有し表現する力を育成する国語科授業の創造
～第６学年「やまなし」の実践から～

仮　説
自分の考えを形成し共有する学習過程を重視し、学んだことを活用できるような学習活動の工夫を行えば、児童の適切に表現する力を育成することができるだろう。

「考えを共有」するとは
一人一人が形成した自分の考えを書いたり発表したりする中で、相違点や互いのよさに気付き、自分の考えを広げていくこと

「表現する力」とは
学習等を通して考えたことを、相手に伝わるように適切に書いたり話したりする力

手立て１：考えの形成と共有を促す学習活動の工夫	手立て２：学んだことを活用し主体的に表現しようとする学習活動の工夫
・　児童の興味・関心を喚起する工夫 ・　自分の考えを明確にする工夫 ・　考えの共有を促す工夫	・　学ぶことへの必要感や目的意識が持続する工夫 ・　自分の読み方を自覚する工夫 ・　振り返りの充実と活用

教育の今日的課題　　地域社会の要請

児童の実態

Ⅲ　研究の実際

１　単元について（「読むこと」の領域）

作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう 「やまなし」宮沢賢治、資料「イーハトーブの夢」」（光村図書）

（１）学習構想案から

本単元では、「熊本の学び推進プラン」が進める学習構想案を活用し、単元計画を構想していった。図２に示したように、単元終了時の児童の姿を具体的に思い描くことで、児童の実態を踏まえた学習課題や学習活動を設定することにつながった。

最高学年である６年生では、これまで積み重ねてきた読みの力を発揮し、教材文を味わいながら読み進めてほしいと考えた。そこで、単元終了時の児童の姿を、学習を通して形成していった考えを、「自分なりの方法で表現しようとする児童」と位置付け、これまで培った様々な読み方や表し方の中から最も納得いく方法を選び活用し、表現しようとする姿を目指すこととした。

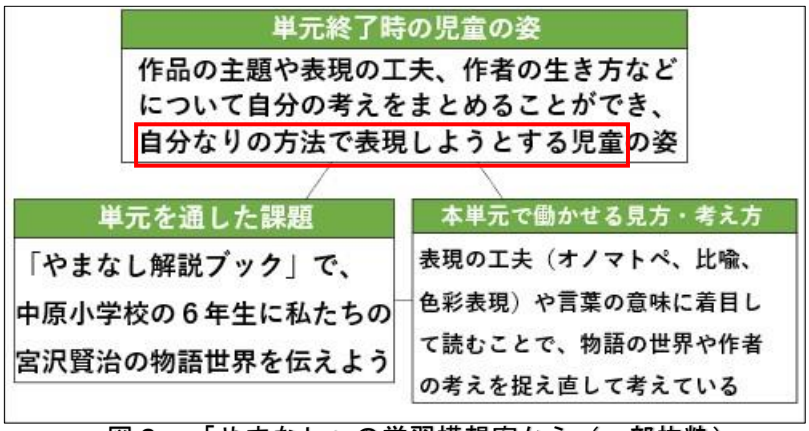


図２　「やまなし」の学習構想案から（一部抜粋）

このことを踏まえ、１学期に交流のあった人吉市立中原小学校の６年生に伝えるための「やまなし解説ブック」を作成することを単元を通した課題に設定した。「やまなし」について授業で学んだことを、毎時間この解説ブックにまとめ、学びを積み重ねていこうと考えた。

（２）教材について

本教材「やまなし」は、宮沢賢治の深い思想性が表れた物語である。初めと終わりは「私」という一人称視点で書かれ、中は客観的視点で書かれた２枚の幻灯の話で構成されている。かにの親子から見た「五月」と「十二月」の世界が対比的に書かれている点や、独創的表現（造語、比喩、オノマトペなど）が多用された点などにおいて、作品の世界を豊かに想像できる教材であると考えた。

また、「イーハトーブの夢」を並行して読み、作者の生い立ちや人間性を知ることで、賢治の世界観と関連付けて「やまなし」の主題や題名の意味などを読み深めることができると考えた。

（３）手立てを踏まえた単元の指導計画

次に単元の指導計画を示す。各時間に取り組んだ学習活動がどの手立てと連動しているかを一覧にまとめ、手立ての具体的実践事項を以下に示した６つに分けて取り組んだ。

手立て１：考えの形成と共有を促す学習活動の工夫	手立て２：学んだことを活用し主体的に表現しようとする学習活動の工夫
・　児童の興味・関心を喚起する工夫 ・　自分の考えを明確にする工夫 ・　考えの共有を促す工夫	・　学ぶことへの必要感や目的意識が持続する工夫 ・　自分の読み方を自覚する工夫 ・　振り返りの充実と活用

次	学習活動	手立て１について	手立て２について
1次	1「やまなし」を読み、感想を書く。 2　感想を交流する。 学習課題を知る。 「イーハトーブの夢」を読み、宮沢賢治の人物像について考える。	・宮沢賢治の本を並行読書し、作者への興味・関心を喚起する。 ・感想を書く視点を提示し自分の考えを必ずもてるようにする。 ・２つの視点（共感、発見）を基に感想を読み合い共有を促す。	・「やまなし解説ブック」を作るという学習課題を提示し、学ぶことへの必要感や目的意識をもたせる。
2次	3　表現の工夫について心引かれる表現を取り上げ、情景を想像する。 4　「五月」の谷底の様子を図に表し、情景を読み取る。 5　「十二月」の情景を読み取る。 6　「五月」と「十二月」の様子を対比して読む。 7　「やまなし」という題にした作者の思いを考える。（本時）	・表現の工夫を付箋に書き出し、友達と交流することで、相違点に気付くようにする。 ・「五月」「十二月」の幻灯図をノートにかくことで物語世界への興味・関心を喚起する。 ・児童の問いから本時の課題を設定し、学習への必要感をもって考えを共有できるようにする。	・学んだことや自分の考えを「やまなし解説ブック」に毎時間まとめていくことで、自身の学びの変容を自覚できるようにする。 ・前時の振り返りを全体で共有し、考えの価値付けや意欲付けにつなげる。 ・授業の中で発見した読み方を提示し、自身の読み方について自覚できるようにする。
3次	8　宮沢賢治の他の作品について感想をまとめ、解説ブックを完成させる。 9　解説ブックを読み合い、感想を共有する。	・児童同士で解説ブックにアドバイスをしたりよさを伝え合ったりし、読み手に対する相手意識をもって作成に取り組むようにする。	・解説ブック鑑賞会を班で行い、学習したことへの達成感や満足感を味わうことができるようにする。

２　仮説に対する手立て１：考えの形成と共有を促す学習活動の工夫

（１）児童の興味・関心を喚起する工夫

教材文の作者である宮沢賢治への興味・関心を喚起するため、教室に宮沢賢治の学級図書を設置した（図３）。学校の図書室の本と町の図書館の本、計３０冊ほどを常備し、日常的に読書に親しむことができるようにした。また、宮沢賢治の作品は児童にとって身近でない作風のものが多い。よって、児童の読書への意欲を持続させ、見通しを持って読むことができるようにするため、「宮沢賢治、読書メーター」シートを作成した。（図３）。シートには、本の題名や読了日、おすすめの度合いや感想を書く欄を設け、自らの読書記録を把握できるようにした。児童は自分の読書傾向を振り返りながら、積極的に読書に親しんでいた。

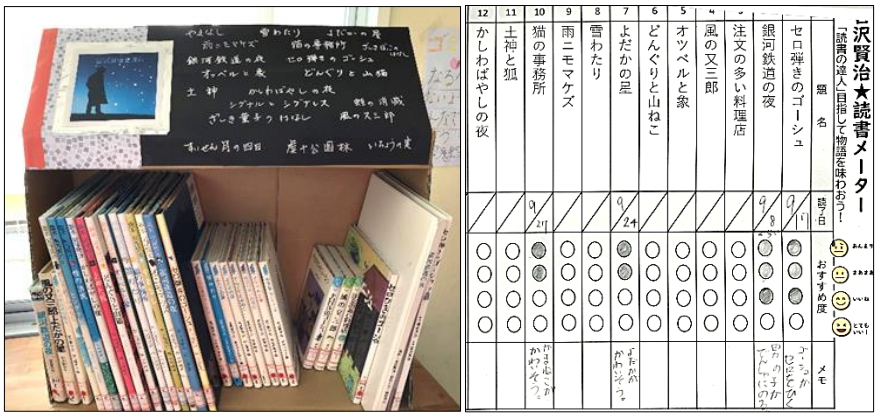


図３　学級図書の様子（左）と「読書メーター」シート（右）

本単元の学習課題は、「『やまなし解説ブック』で中原小学校の６年生に私たちの宮沢賢治の物語世界を伝えよう」である。授業等で学んだことを基にして作品に対する自分の考えを整理し、一冊にまとめたものを「解説ブック」と命名した。初めて取り組む活動である。児童が「やってみたい」「自分にもできそう」という期待感や、学習に対する具体的な見通しを持つことができるようにするため、導入では、「ごんぎつね」を題材にした「解説ブック」を提示した（図４）。作成に消極的だった児童も、４年時の既習事項である「ごんぎつね」が題材にされていることで中身に興味をもつことができ、「解説ブック」の概要をつかむことにつながった。

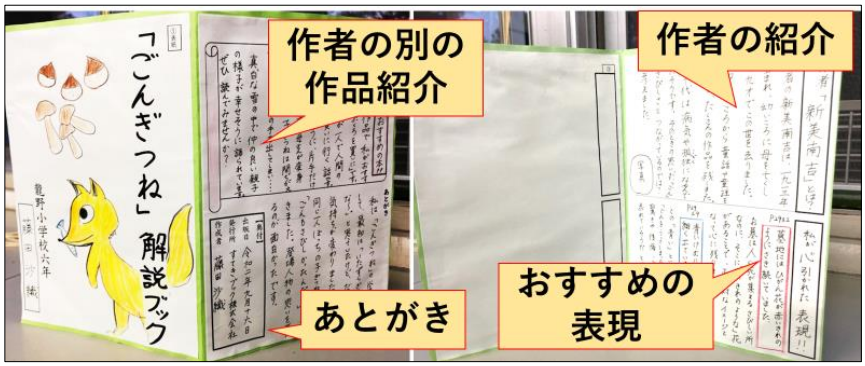


図４　児童に示した「ごんぎつね」の「解説ブック」（担任作成）

（２）自分の考えを明確にする工夫

第１時で物語の感想を書く際に、図５に示した４つの視点を提示した。「やまなし」は作

者の思想性が強く表れた作品であり、一読しただけで内容を捉えることは難しい。そこで、感想を考える視点を明確に示し、全員が自分なりの考えを書けるようにした。また、視点は全体に示すだけでなくノートにも貼ることで、児童は自分の記述と視点を照らし合わせながら感想を書き進めることができた（図５）。

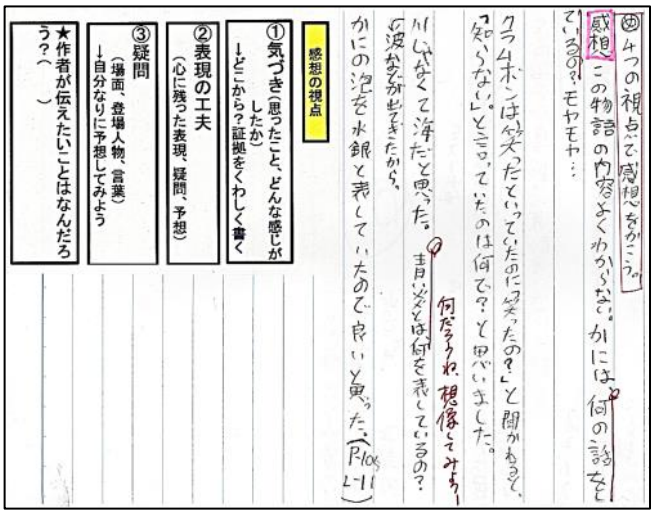


図５　感想の視点を貼った児童のノート

第３時では、「やまなし」の物語世界を様々な視点から捉え、考えの形成につなげる工夫として、本文中からオノマトペなどの表現の工夫を付箋に書き出し、自分がおすすめする言葉を選ぶという活動を行った（図６）。付箋に一つずつ表現の工夫を書き出すことで、言葉が増えていく過程を児童は視覚的に実感することができ、「もっと表現の工夫を見つけたい」と意欲的に本文を読み進める姿が見られた。さらにその中から、特におすすめの表現の工夫を見付け、選んだ理由をノートに書いていった。その後のペア交流では、ノートを見せ合いながら、互いの読みの相違点に気付くことができていた。

また、第４・５時では、「五月」と「十二月」の場面を図に表すことで物語の世界を読み深めていった。本文は比喩表現が豊かで、色彩語も多く使われている。言葉だけで物語の世界を解釈するのではなく、図に表すことで、児童は「やまなし」の世界により関心をもち、具体的に情景描写等をイメージしやすくなると考えた。

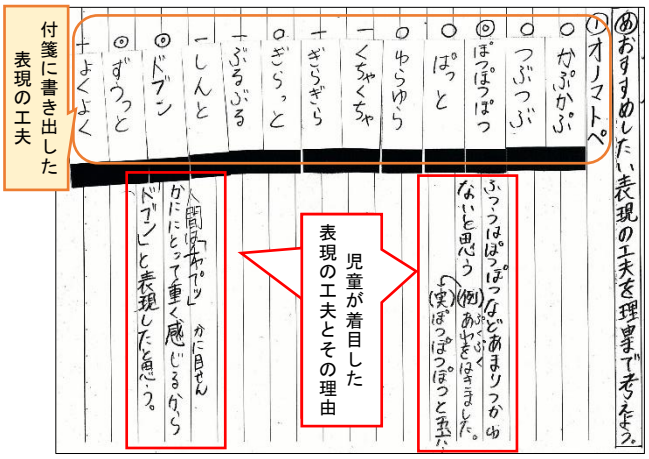


図６　表現の工夫を付箋に書き出した児童のノート

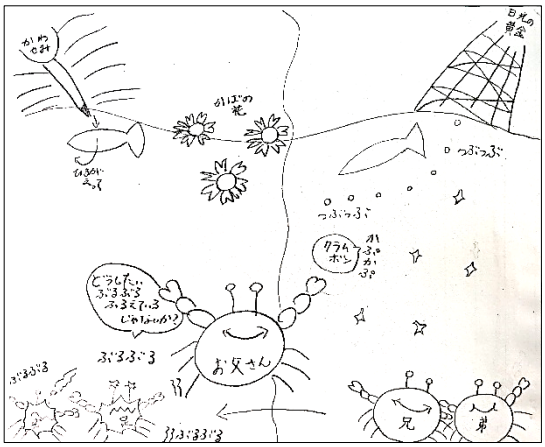


図７　児童がかいた「五月」の幻灯図

図７は、児童が図に表した「五月」の様子である。この図をかいた児童は、真ん中に線を引き、右と左のカニの様子をかき分けることで、場面の変化を読み取っていることが分

かる。また、本文中のオノマトペや会話文などを書き加え、より詳しく場面を表現しようとしていた。児童がかいたこれらの図は、班や全体で見合うことで、情景描写を全員で確認したり言葉の意味を理解したりすることにつながった。

（３）考えの共有を促す工夫

「やまなし」を読んだ感想を第２時で全体交流する際、全員分の感想を一覧表にして配付した（図９）。これは、一人一人の考えを全員が把握できるようにするためである。さらに、読み進める際は、図８のように手順を電子黒板で示し、「共感」と「発見」という二つの視点で読み合うようにした。視点別にシールを貼るという活動を取り入れることで、児童は自分だけじゃない友達の考えにも関心をもって読もうとする姿が見られた。さらにシールで色分けすることで、児童は自分の考えを可視化することができ、班で交流する際も友達との相違に着目し、比較して考えることができていた。

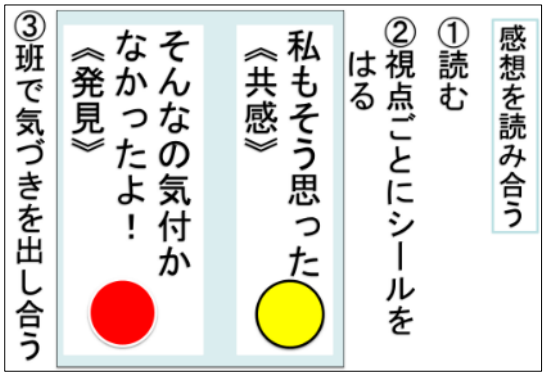


図８　電子黒板に示した感想交流の視点

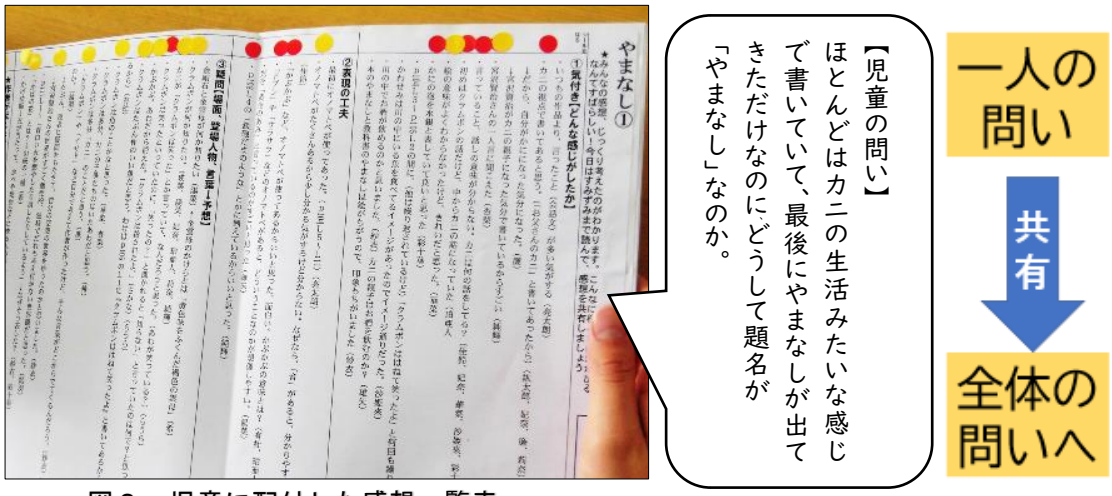


図９　児童に配付した感想一覧表

感想交流では、班で交流した後、全体交流を行った。ここでは、児童が共感した考えや自分では気付かなかった考えを出し合うことで、一人の意見を全体で共通理解することができ、これから学習を進めていく上での見通しを持つことにつながった。

ここで、感想交流の際に出された一つの問いに着目する。それは、「物語はカニの生活が書かれているのに、なぜ題名が『やまなし』なのか」という考えだ。感想に書いた児童は一人だったが、全体で感想を読み合った際、この問いに共感した児童は半数近くいた。感想を共有することを通して、一人の問いが全体の問いへと変容した場面であった。そこで、この問いを検討した第７時の実践を以下にまとめる。

《第７時の実践》

○目標：「やまなし」という題にした作者の思いを考え、友達と意見を共有することを通して、物語の世界について自分の考えをまとめることができる。

○展開案

過程	学習活動 （◇予想される子供の発言）	指導上の留意事項 （学習活動の目的・意図、内容、方法等）
導入 10分	１　前時を振り返る。 ◇5月より１２月の方が命が守られてる感じ。 ２　問いをもとに、学習課題を確認する。 問い：作者はなぜ「やまなし」という題にしたのだろう？ ◇「やまなし」はカニの親子にとって、とても大切。 ◇五月のことは言わなくていいのかな。	○５月と１２月を比べた振り返りを共有し物語の主題につなげるようにする。 ○１２月に出てくる「やまなし」を取り上げ、題がもつ意味に着目できるようにする。 ○必要に応じてペアや班トークを取り入れ、全員が自分の考えをもって記述につなぐようにする。
	めあて：作者が「やまなし」という題にした理由を考え、この物語を解説しよう	
展開 25分	３　自分の考えを書く。（ノート） ◇かにを幸せにする「やまなし」の事を一番伝えたいと考えたから。 ◇自分の力で美味しくなり周りを明るくさせる「やまなし」の存在は、人々を喜ばせようと生きた作者と似ている。だから・・・ ４　班で意見を交流する。 ◇宮沢賢治は安心、平和な世界を目指していたから、自然の力でカニを幸せにする「やまなし」の大切さを伝えたかったと思う。 ◇5月のカワセミは命を奪う存在だから、題名にはいれたくなかったんじゃないか。 ５　全体で話し合う。 ◇私は5月と比べて考えていたけど、作者の生き方をもとに考えた意見を聞いてもっと納得しました。 ◇「やまなし」という題は果物の名前だけじゃなく、作者の思いがこめられているから、この名前がいいと思います。 【期待される学びの姿】 対話の中で得た考えと自分の考えをすり合わせ、より納得できる考えにまとようとする姿	○「つなぐ」考え、「比べる」考えを取り上げ、これまでの学びを活用して考える手立てとする。 ・「五月」の描写と比べて ・作者宮沢賢治の人間性とつなげて ・「イーハトーブの夢」の内容とつなげて ・作者の他の作品とつなげて ○対話グループを複数回設定し多様な考えを交流するよう伝える。その中で納得する考えや自分と異なる考えに出会うことで、考えを深めようとする意識をもたせる。 ○児童の関わりを深めるため、比べる発言や真似したい反応等を全体で取り上げる。 ○教師は、考えの着目点（物語の描写、作者の人間性、作者の作品など）が何かを明確にし、児童の意見のつながりを示しながら関わるようにする。 【具体の評価規準】考えを共有し自分の考えを広げている（方法：観察、ノート） ○他の児童の考えや記述を基に自分の考えを捉え直し、問いに対する自分の考えをまとめることができる。 ○話し合いの中で自分が納得した考えに着目して考えるよう促す。
終末 10分	６　学習を振り返る。「やまなし」という題に対する自分の考えをまとめる。 ◇この「やまなし」は、不思議な物語の中に宮沢賢治の「周りを喜ばせ、平和な世界を大切にしたい」という思いが込められている物語です。 ◇初めて読んだときには分からなかった「やまなし」の意味が、みんなの考えを聞いて「そういうことか」と納得した。	○学習のまとめとして「やまなし」という物語を自分なりに捉え直すことができるようにする。 ○振り返りの内容が解説ブックに載せる文章につながることを意識させる。 ○初発の感想を思い起こし、自分の考えの変容や深まりに気付けるようにする。

ア　導入場面

本時では児童に、物語の世界と作者の生き方をつなげた読み方に気付いてほしいという教師のねらいがあった。そして、教師が読み方を教えるのではなく、児童自身がこれまでの学習を活用することで新しい読み方を獲得できる授業にしたいと考えた。そこで、授業冒頭の学習を振り返る場面では、まだ作者の背景や自伝的内容である「イーハトーブの夢」ことは取り上げず、共通の問いについてのみ全体で確認することにした。その際、ノートや掲示物（図１０）などに着目させ、これまでの学びを活用して、「やまなし」という題名の意味を考えることを意識させた。学びの足跡が掲示されていることで、児童は「五月」や「十二月」の特徴を改めて確認することができ、物語の世界観を共通認識した上で本時の課題につなげることができた。

図１０　教室に掲示した学習の足跡

イ　導入～展開場面

まず、導入場面で本時の問いを全体に投げかけたが、この時点で、「やまなし」という題にした理由を明確にもてていた児童は０人であった。そこで、児童一人一人が自分なりの考えをもつことができるよう、ペアや班で検討する時間を充実させた（図１１）。

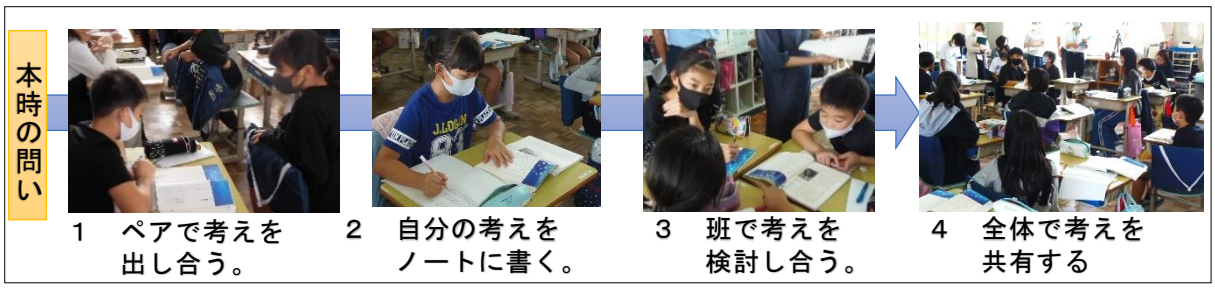


図１１　児童が考えを形成し共有する過程

全体に問いを投げかけたときは、考えが思い浮かばず戸惑った反応をする児童が多くいたが、ペアや班で自由に考えを出し合う時間を段階的に設定したことで、児童は考えを徐々に整理することができていった。そして、班交流後には全員がノートに自分の考えを書くことができていた。

全体共有の場面では、発言したい児童が自ら起立して発表し、考えをつなげていく自由発表を行った。そのときの授業記録の一部を図１２に示す。教師の発問に対し、Ｃ２は②「自然豊かということを示したかったから」という自然に着目した考えを発表した。そこで、教師が共通する考えはないか全体に促すと、Ｃ３は「やまなし」を、②「幸せを運ん

できてくれるもの」③「平和」の象徴と捉えるような発言をしていた。さらに、Ｃ４は④のように述べ、本文中のカニの家族の変容に着目して考えていた。このことから児童は、これまでの授業で学んだ物語の世界観を自分なりに解釈し、叙述とつなげたり自分なりの言葉で表現したりし、考えを共有していたことが分かる。

また、Ｃ５は⑤「『やまなし』のことがクライマックス」と発言している。前時までの授業で物語のクライマックスについて取り上げたことはなかった。C5 は本単元だけでなく、これまで学んできた学習経験を活用して自分の考えを形成することができたと言える。

話し合いが進み、教師が⑥のように違った視点からの意見を出すよう働きかけると、Ｃ７が「宮沢賢治さんは農業が好きだったから」という、作者に注目した意見を発表した。そこで教師は、作者に着目した意見を促す発問を行った（⑧）。するとＣ８は、第２時で読んでいた資料「イーハトーブの夢」の叙述と関連付け、作者の行動から「農業が好き」という根拠を述べることができていた。

前時までの学びとつなげる児童の意識や共有を促す教師の発問の積み重ねにより、児童は自分たちの読みを手掛かりにして、「やまなし」という題名の意味を作者の生き方とつなげて考えようとしていた。

Ｔ　：なぜ「やまなし」という題にしたんだろう？
Ｃ１：もしも「やまなし」がなかったら、カワセミとカニの話になって、少し怖い話になるからです。
Ｃ２：①自然豊かということを示したかったからです。
Ｔ　：つなげて意見ないですか？
Ｃ３：この物語では、②幸せを運んできてくれるものの中で一番が「やまなし」だったから。だから、最後のｐ114 ページの場面を見てください。
児童：はい
Ｃ３：その中では、やまなしを③平和として、いろいろと話し合えているから、それが一番の幸せだったんじゃないかなと思います。
児童：同じです。似ています。
Ｃ４：ぼくは、やまなしが落ちてきてから④カニの家族が仲良くなったからだと思いました。
Ｔ　：カニの家族、仲良くなったの？
Ｃ４：仲良くなったというか、話が多くなった。
児童：ケンカとかが少なくなった。
～略～
Ｃ５：映画とかでは、クライマックスが最後らへんにあるから、最後らへんにある⑤「やまなし」のことがクライマックスで、題名がその「やまなし」になったかもしれない。
Ｔ　：クライマックスって何？
児童：一番盛り上がるところ。
～略～
Ｃ６：川にやまなしが落ちてきた場面がありますよね？
児童：はい
Ｃ６：その場面が落ちたときに印象深かったと思ったから（「やまなし」という題名にしたと思いました。）
Ｔ　：⑥Ｃ６さんの意見と似ていて、ちょっと違ってという人、どんどん発表してみて。
Ｃ７：⑦宮沢賢治さんは農業が好きだったから、植物が好きだったから、やまなしのことを書いたんじゃないかと思いました。
Ｔ　：⑧宮沢賢治さんとつなげて考えた人（数名挙手）Ｃ８さんも書いてた？
Ｃ８：Ｃ７ちゃんとちょっとだけ似ていて…。最後にだれか知らない人が来ましたよね。
児童：「イーハトーブ」のことじゃない？
Ｃ８：肥料のことを教えてもらうことがあって、知らない人が来ましたよね？肥料の話をしているから、農業が好きなのかなと思いました。
児童：あー！

図１２　第７時の授業記録１
（Ｔは教師、Ｃは児童を示す）

ウ　展開～終末場面

児童は、作者である宮沢賢治の生き方に着目したことで、より具体的な叙述を基に考えを共有していった。図１３より、Ｃ９は⑨のように発言し、作者が故郷の状況を物語の様子と重ねることで「やまなし」が登場する「12 月」を理想として捉えたのではないかと推測している。さらに教師が、⑩「どうなってほしかったんだろうね？」と具体を尋ねたことで、Ｃ10 は本文中の叙述から根拠を探し（⑪）、作者の理想を基に自分の考えを伝えることができていた。

このように全体で考えを共有した後、本時の授業の振り返りを行った。児童の振り返りの一部を図１４に示す。児童アは友達の考えのどこに納得したかを具体的に記述し、題名に対する自分なりの解釈を綴っていた。全体共有の場で、作者が考える理想の世界について検討したことで、児童アは振り返りの場面で改めて理想の世界ついて問い直し、自分なりの表現で書き表すことができていた。また、児童イの①の記述に着目すると、初めて物語を読んで「わからない」と感じた以前の自分と、何回も読み返して学びを積み重ねた今の自分を比較していることが分かる。そして「何回も読み返すと分かってくれるかもしれない。」という記述から、児童イ自身が自分の学びの変容を自覚することができたことが分かる。

児童が書いた振り返りは、授業の終末に全体で発表し合い、学習のまとめにつなげた。作者の生き方と関連付けることで物語の見方が変わることを実感したという声を多く聞くことができた。

Ｃ９：やまなしの５月は魚がカワセミに食べられて、カニの子どもたちがぶるぶるふるえていますよね。そのときは資料の方の⑨宮沢賢治が生まれた岩手の花巻でも津波とか洪水とか地震とか起きていて、５月はずっと怖いて感じがしますよね。でも、やまなしの１２月は、花巻がこんな風になってほしいなという思いで書いたから・・・花巻の町がこんなふうになったらいいなということだと思いました。

Ｔ　：(掲示資料の５月を指さして）こっちが怖いイメージだったっけ？（「はい」）だけど１２月は、こんな風な世界になってほしいと、花巻が。花巻ってどこですか？

Ｃ９：宮沢賢治が生まれた場所。

Ｔ　：⑩どうなってほしかったんだろうね？

Ｃ10：楽しみや喜びを（教科書から探している）117 ページの下の行で、「⑪苦しい農作業の中に楽しさを見つける、工夫することに喜びを見つける、そうして未来に希望をもつ、それが先生としての賢治の理想だった」と書いてあるので、楽しさや喜びを、が理想だったと書いてあったので、こうなってほしいと思ったと思いました。

Ｔ　：ということは、やまなしの世界って、宮沢賢治さん、自分の花巻と重ねてるのかな？
周りの人と最後、自分の考えを整理してごらん。

図１３　第７時の授業記録２
（Ｔは教師、Ｃは児童を示す）

ア　〇〇ちゃんの「農業が好きだから」という意見に納得しました。カワセミが魚をうばってだれかが怖いとか思うより、自然のなしが落ちてきて笑顔になる方がいい。そんな笑顔がいっぱいな未来を（作者）は望んでいたと思う。

イ　私の「やまなし解説ブックを一回読んだだけじゃ、①最初の私達みたいにわからないかもしれない。だけど、何回も読み返すと分かってくれるかもしれない。だから、読み返して納得してほしいと思いました。

図１４　第７時の児童の振り返り

３　仮説に対する手立て２：学んだことを活用し主体的に表現しようとする学習活動の工夫

（１）学ぶことへの必要感や目的意識が持続する工夫

今回、単元を通した課題を「『やまなし解説ブック』（以下、解説ブック）で、中原小学校の６年生に私たちの宮沢賢治の物語世界を伝えよう」と設定した。児童の学ぶ意欲を単元を通して持続させるためには明確な相手意識と目的意識が必要と考えた。そこで、同じ「やまなし」を学習しており、交流のあった中原小学校の６年生に伝えるという目的意識と、学んだことを分かりやすく表現し伝えるために解説ブックを作成するという目的意識を軸にして単元構想を考えた（図１５）。

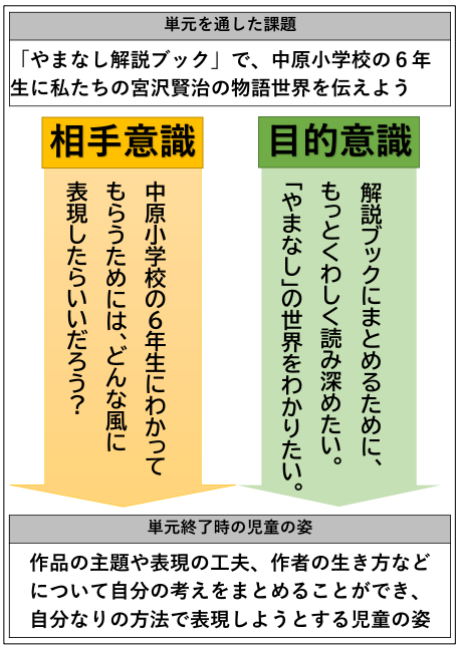


図１５　単元構想図

解説ブックは、毎時間の授業で学んだことを１ページずつ積み重ね、作成していった。

図１６は児童が作成した解説ブックの一例である。見開きページには授業を通して考えた自分の解釈や意見をまとめている。読み手によりわかりやすく伝えるため図や吹き出し等を取り入れ、文末に呼びかけ表現等を使い作成することができた。

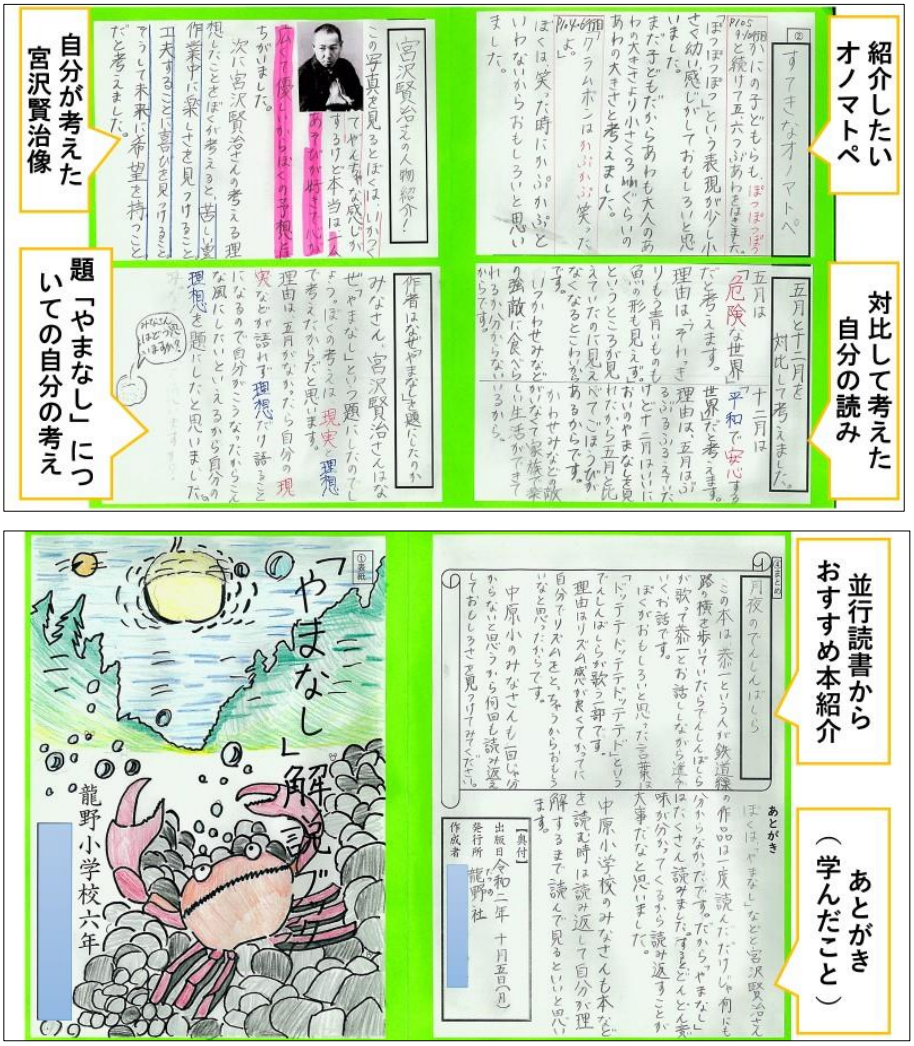


図１６　児童が作成した「やまなし解説ブック」

完成した解説ブックは中原小学校に郵送し、返答として感想が書かれたメッセージを頂くことができた（図１７）。「『やまなし』のことがもっとよく分かりました。」「分かりやすく書かれていてすごいです」と言った温かい言葉をもらい、嬉しそうにメッセージを読む児童の姿が見られた。また、11 月の授業参観では、保護者に解説ブックを紹介する時間を設定した。自分たちの学びを足跡を実際に見てもらい、励ましや褒める言葉を直接掛けてもらう貴重な機会となった（図１８）。

図１７　中原小学校から届いたメッセージ

図１８　保護者に解説ブックを紹介する様子

（２）自分の読み方を自覚する工夫

本単元で目指す児童の姿は、授業で学んだことを自分なりの方法で表現できる児童である。そこで、様々な読み方で物語を読む面白さを味わうことができるよう、毎時間、多様な読み方に着目できるよう学習活動を計画した（図１９）。

過程	学習活動
一次	1　「やまなし」を読み、感想を書く。
	2　感想を交流する。学習課題を知る。「イーハトーブの夢」を読み作者の人物像を考える。
二次	3　紹介したい表現の工夫を取り上げ、情景を想像する。
	4　「五月」の谷底の様子を図に表し、情景を読み取る。
	5　「十二月」の情景を読み取る。（１２月図は宿題）
	6　「五月」と「十二月」の谷川の様子を対比して読む。
	7　「やまなし」という題にした作者の思いを考える。
三次	8　宮沢賢治の他の作品について感想をまとめ、解説ブックを完成させる。
	9　解説ブックを読み合い、感想を共有する。

【読み方】
①カニの**視点**に着目
②**登場人物**に着目
③**表現の工夫**に着目
④**対比**して読む（物語の変化、登場人物、色、情景など）
⑤**題名の意味**に着目
⑥**作者の生き方**に着目

図１９　授業で着目させたい読み方について

図１９に示した６つの読み方は、教師が示すのではなく児童の発言や記述等から引き出すようにした。ある場面で、具体的な視点や登場人物に着目している児童がいたら全体に紹介し、そ

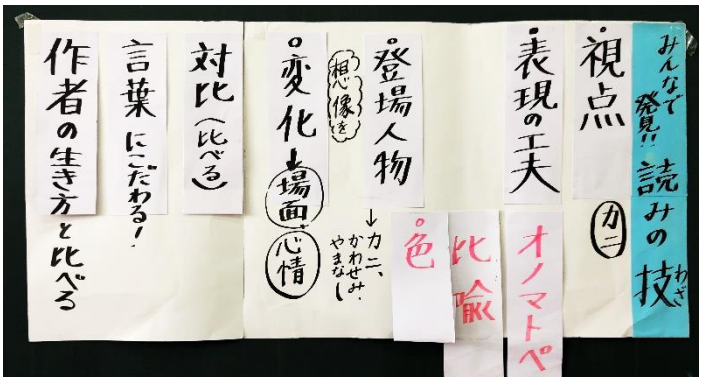


図２０　「みんなで発見！読みの技」の掲示

の児童が何に着目しているか全員が自覚できるようにした。そして、獲得していった読み方は「みんなで発見！読みの技」と題し、一覧にして掲示した（図２０）。

「読みの技を自分たちで発見できた」という意識をもつことで、児童は一つ一つの読み方を活用してみようという意欲が増し、様々な視点で「やまなし」の世界を解釈することにつながった。

図２１は、児童がオノマトペについてまとめた解説ブックのページである。①「ドブン」という言葉については、「かににとっては大きい音だから、かに目線でかいている」と説明し、カニの視点から捉えた自分の解釈を述べている。一方、②「ずうっと」という言葉については、「あまり使わない『ずうっと』という表現があっておもしろいと思いました。」と説明し、表現の工夫の面白さに着目して考えていた。授業を通して多様な読み方を学んだことで、「やまなし」を解説する際に最も納得した読み方や興味をもった読み方を児童が自ら選択し、自分の言葉で表現することができていた。

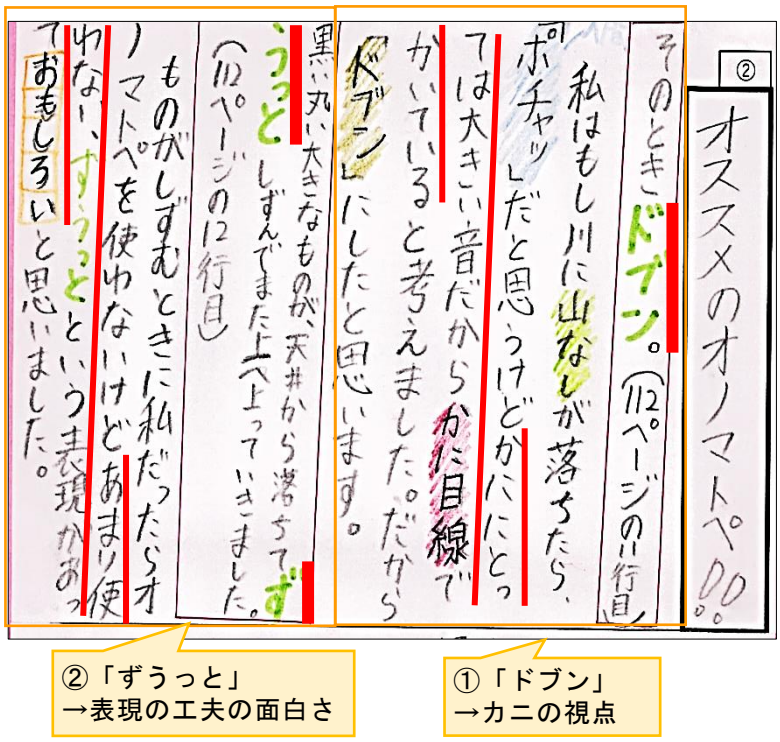


図２１　児童が作成した「解説ブック」（一部抜粋）

（３）振り返りの充実と活用

本校では、振り返りの視点を「き・な・こ（図２２）」と設定し、全学年統一して取り組んでいる。本単元でも、毎時間の振り返りには黒板に振り返りの視点を掲示し、これらの視点に沿って学習を振り返るようにした。視点が明確であり、様々な学習の場で取り組んでいるため、児童もこれらの視点を意識して進んで振り返りの記述に取り組んでいた。

振り返りの場を設定することは、本時で発表できなかったり、最初自分の考えがもてなかったりした児童の考えを表現する場の確保につながる。また、教師も、振り返りを通して児童全員の考えを把握することができ、学んだことを次につなげるための時間となった。

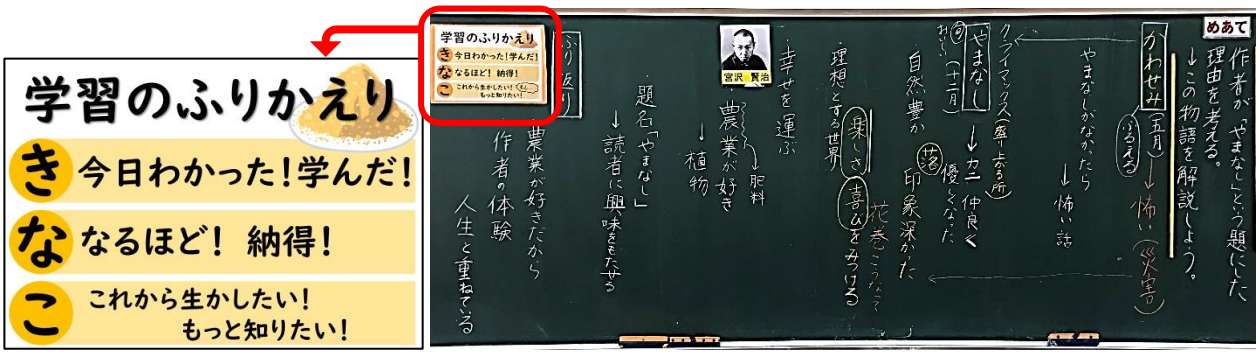


図２２　振り返りの視点（左）と第７時の板書

また、児童が書いた振り返りは次時の冒頭に電子黒板で紹介した（図２３）。これは、前時で振り返りの共有が十分にできなかったときの補足としての役割と、全体での共通理解を図りたい読み方や書き方に振り返りを通して注目させるという役割がある。

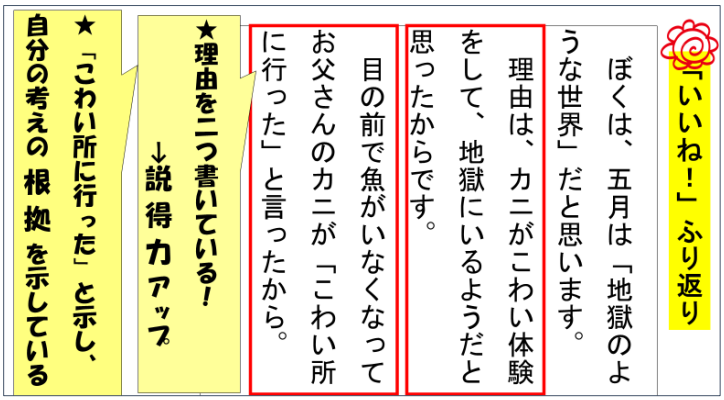


図２３　電子黒板に提示した児童の振り返り

振り返りは紹介するだけでなく、「学んだことをどのように捉えているのか」「これからの学習に生かせることは何か」等の視点について教師が解説を行った。児童の振り返りにこのような価値付けをすることで、紹介された児童は自分の考えに自信や有用感をもつことができ、聞いている児童は自分との相違点に気付き新しい見方や考え方で捉えたりできるようになると考えた。実際、紹介される振り返りを児童は楽しみにし、誰がどんな振り返りを書いているか興味をもって聞こうとしていた。

また、振り返りの発展として、最終時には完成した解説ブックの鑑賞会を行った。図２４の児童が書いた感想箋には、「読む人に問いかけている所がいい」という表現方法に着目した記述や、「しょうこ（根きょ）をのこしているのでいいと思います。」という読み方に対する記述があり、学んだことを活用して読んだり伝えたりすることができていた。毎回の振り返りを通して、児童は視点を明確にして互いのよさを見付けようとする意識を高めていった。

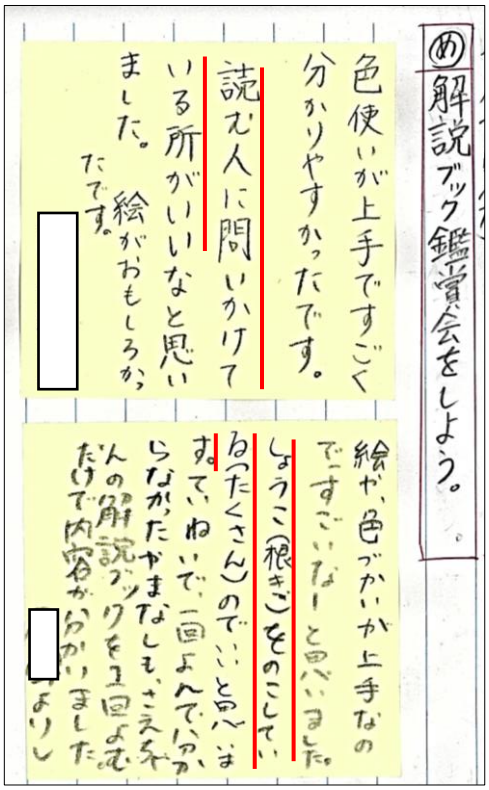


図２４　解説ブックを読んだ児童の感想

Ⅳ　成果と課題

１　成果について

（１）手立て１：考えの形成と共有を促す学習活動の工夫

○　第１時に「やまなし」を読んだ感想では、２０名中６名が「意味が分からない」「何の話をしているのか？」と言った内容を書いていた。その中の児童Ａに着目すると、図２５のように、第７時の振り返りでは以前と今の自分の学びの変容を自覚していることが分かる。そして、学んだことをまとめた自らの解説ブックを「（中原小学校の６年生に）読み返して納得してほしい」と記述しており、児童Ａにとって解説ブックを作成することは「やまなし」という物語をより深く読み取るために有効であったと言える。

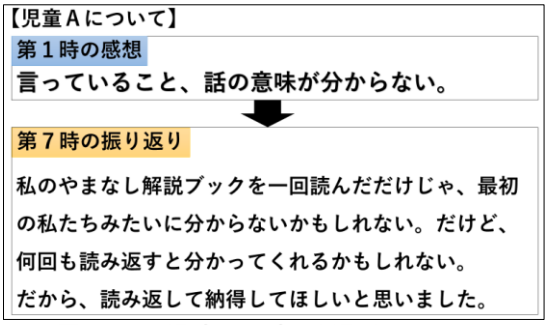


図２５　児童Ａの振り返りについて

○　図２６の質問１より、９割の児童が理由や根拠を基にして自分の考えを書いたり発表したりできたと答えていた。考える際の視点を明確に提示し、「考えをもつ」という児童の意欲を高めたことや、考えの根拠を教師が絶えず問い返していたことで、理由や根拠を基にして考えようとする意識が高まったと考える。

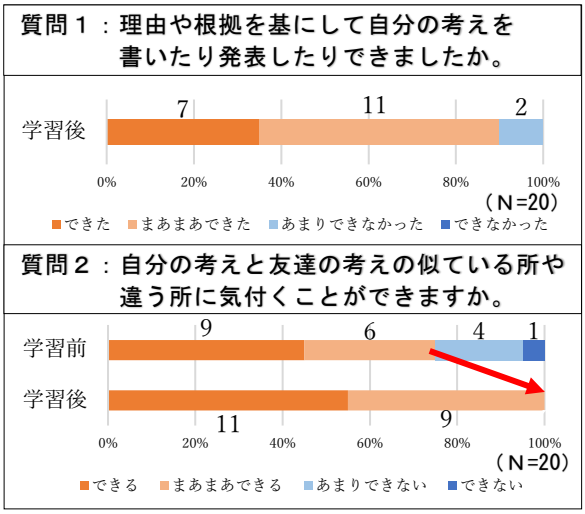


図２６　学習の前後における児童アンケートの結果

また、質問２に着目すると、友達との考えの相違に気付くことができると答えた児童は、学習前後で大きく増加した。感想交流の際にシールを活用し、考えの相違点を可視化したり、ノートや図をペア、班、全体で交流し、違いやよさを認め合う活動を多く設定したりしたことが、児童の意識を高めるのに有効であったと言える。

○　図２７は、昨年度（１２月）と今年度の単元終了後（１１月）にとった児童アンケートを比較したものである。「やまなし」の学習後は、２０名全ての児童が友達と話し合うことで

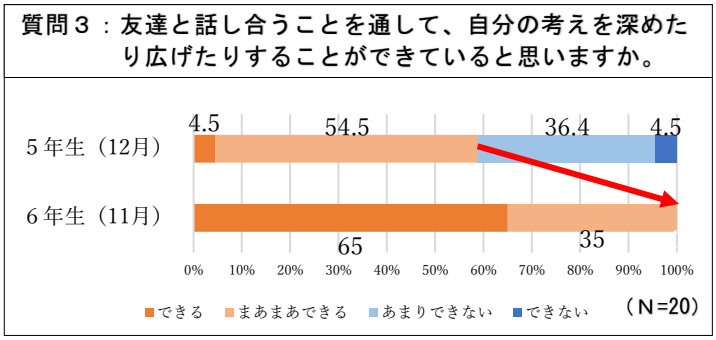


図２７　昨年度と今年度の児童アンケートの比較

自分の考えを深めることができたと実感することができていた。一人の考えを全体で共有する場面を多く設け、友達の考えと比べたり関係付けたりして考えるような声掛けや活動を積み重ねてきたことが有効であったと考える。

図２８は、第１時で「やまなし」という題に疑問をもった児童の解説ブックである。学習を積み重ね、友達と考えを共有してきたことで生み出された自分なりの解釈を述べることができていた。「作者はなぜ『やまなし』という題にしたのか」という問いに対し、児童は、「宮沢賢治は、農作業が好きだし、十二月は幸せになりたいという宮沢賢治の理想がかいてあって、理想の思いがこめられていると思ったからです。」とまとめていた。授業を通して様々な友達の考えを聞き、その中で最も納得した考えを取り入れて書き表すことができており、児童の考えが深まったことが分かる。

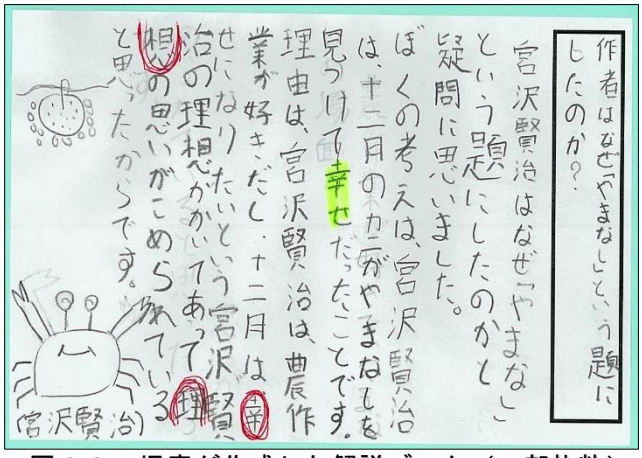


図２８　児童が作成した解説ブック（一部抜粋）

（２）手立て２：学んだことを活用し主体的に表現しようとする学習活動の工夫

○　毎時間ごとに完成に近づく解説ブック作りは、学んだことを視覚的に把握することができ、児童自身が自分の読みの変容を自覚する上で効果的な学習活動となった。

○　単元終了後の児童アンケートで解説ブック作成についての感想を尋ねると、図２９のような意見が出された。「一つ一つに理由を付けて考えること」や「読み手の視点になって、どう受け取ってもらえるかを考えながら・・・」という学びの視点は、今後の学習でも活用できる力である。明確な相手意識と目的意識を設定したことで、よりよい表現の仕方を主体的に考えようとする児童の意識を高めることにつながった。

【質問】解説ブック作成を通して頑張ったこと、学んだことは？

- ●五月と十二月で、宮沢さんの生き方と重ねて考えたこと。
- ●一つ一つに理由を付けて考えること。
- ●なぜ作者が「やまなし」という題にしたのか、というところがとてもなやんだし、難しかった。
- ●読み手の視点になって、どう受け取ってもらえるかを考えながら呼びかける言葉を入れること。

【質問】これから生かしたい読みの技は何ですか？

①	視点に注目する	９名
②	場面や心情の変化に注目する	１１名
③	表現の工夫に注目する	１２名
④	登場人物に注目する	１０名
⑤	対比して考える	１０名
⑥	作者の生き方に注目する	１１名

図２９　単元終了後の児童アンケートの結果（N=22）

○　図２９の「これから生かしたい読みの技」について尋ねた質問では、学習した６つの読

み方全てにおいて半数以上の児童が今後も生かしていきたいと答えていた。様々な読み方で物語を読み取っていけるよう毎時間の学習活動に変化をもたせ工夫したことや、児童自らが発見した読みの技を掲示し、意識付けてきたことが、児童自身が多用な読み方を活用しようとすることにつながった。

図３０の児童Ｂの振り返りに注目する。児童は第７時で「作者の生き方」に着目する読み方を知り、この読み方を活用することで「やまなし」の物語世界をより理解することができたと自覚していた。

【児童Ｂについて】

第１時の感想

この物語の内容がよくわからない。カニは何の話をしているのか？

第７時の振り返り

全体を通して、最初意味が分からなくて、クラムボンやかわせみ、やまなしは知らなかったけど、宮沢さんの人柄と重ねて考えると何を伝えたかったか分かった。

図３０　児童Ｂの授業の振り返り

２　課題について

（１）手立て１：考えの形成と共有を促す学習活動の工夫

○　考えを共有する場面で、教師がどのように関わっていくかは毎時間の課題であった。児童のどの発言を取り上げどのように関係付け、いつ問い返しをし、考えを広げていくかについては今後も検討していく必要がある。

○　本単元は９時間計画の予定だったが、解説ブックを完成させるため、実際は１１時間取り組むこととなった。単元を通して作成物を完成させる場合、限られた時間の中で全体を見通した計画を立てる必要がある。

（２）手立て２：学んだことを活用し主体的に表現しようとする学習活動の工夫

○　本単元で身に付けた読み方を実際に活用できる場面を設定していく必要がある。

○　４５分の授業の中で振り返りの時間が充分に取れないことが数回あった。また、振り返りの視点を統一しているために、内容がマンネリ化してしまう面があった。振り返りの時間の確保に加え、視点を絞ったり変化させたりするなどの工夫を図る。

○　図３１より、授業前後で「国語が好き」という意識の変容はほとんど見られなかった。解説ブックづくりに意欲的に取り組み、授業でも活発な意見交流ができていたが、「国語が楽しい」「国語の授業が好き」という意識の変容までには至らなかった。

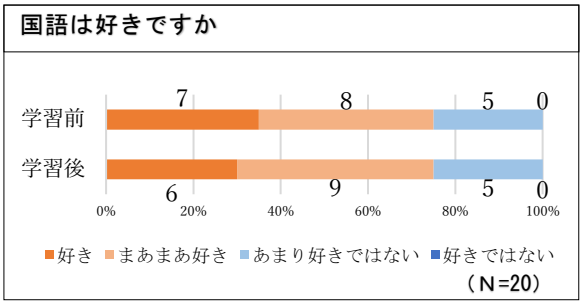


図３１　授業前後の児童アンケートの結果

今後も、児童が「読んでみたい」「もっと書きたい」と思い、意欲的に授業に臨むような学習活動の工夫と授業改善が必要である。

《引用文献》

[i] 文部科学省：小学校学習指導要領解説総則編、ｐ３、２０１７

[ii] 前掲書ⅱ）ｐ３７－３８

[iii] 文部科学省：小学校学習指導要領解説国語編、ｐ１１、２０１７

[iv] 前掲書ⅱ）ｐ１１

《参考文献》

〇熊本県教育委員会：熊本の学び推進プラン、熊本県教育庁教育指導局義務教育課、２０１９

〇石井英真：授業づくりの深め方－「よい授業」をデザインするための５つのツボー、ミネルヴァ書房書房、２０２０

〇鹿毛雅治、藤本和久編：「授業研究」を創る－教師が学びあう学校を実現するためにー、教育出版株式会社、２０１７

〇プロジェクト・ワークショップ編：読書家の時間－自立した読み手を育てる教え方・学び方実践編、新評論、２０１４

〇藤森裕治著：学力観を問い直す国語科の資質・能力と見方・考え方、明治図書出版社、２０１８

〇藤森裕治・宮島卓朗・八木雄一郎編：交流－広げる・深める・高めるー、東洋館出版社、２０１５

おわりに

「授業って、面白い！」

これは、「やまなし」の研究授業を終えたときの感想です。「作者はなぜ、題名を『やまなし』にしたのか」という、正解のない問いを考える授業で子どもたちは、実に豊かで多様な考えを出し合いました。初めて「やまなし」を読んだときの表情とは違い、積み重ねた学習内容を生かし、自分の経験と重ね、友達の意見を検討しながら自分が納得いく考えをどうにか伝えようとする姿がありました。

「やまなし」は、宮沢賢治の思想性が色濃く表れた教材です。「あらすじをどうつかめばいいのか。」「物語の主題は何か。」など、教材文「やまなし」を扱う授業づくりに勝手な苦手意識を抱いていた私自身も、そんな子どもたちの姿に感化され、授業づくりの魅力を再確認することができました。そして、子どもたちと共に自分自身が学び続けることの大切さを実感しました。

子どもたちの実態から出発し、子どもたち自らが「書いてみたい」「伝えるために読まなくちゃ！」という思いをもてるような学習活動を実践できれば、学びはつながり広がっていくことを、子どもたちから教えてもらいました。今回の学習で子どもたちが獲得した読む力や表現する力が、今後の日常生活でも活用され、発揮されていくよう、今後も子どもたちの学びを支えていきたいと考えます。

そして、今回の実践を通じて得た成果をこれからの授業づくりに生かし、明らかになった課題を踏まえながら、今後も授業改善に邁進していきます。

甲佐町立龍野小学校

教諭　藤田沙織